

主日礼拝説教「互いに仕え合う」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年8月9日

【旧約聖書日課】イザヤ書 54章1～8節

- 1 喜び歌え、不妊の女、子を産まなかった女よ。
歓声をあげ、喜び歌え
産みの苦しみをしたことの無い女よ。
夫に捨てられた女の子供らは
夫ある女の子供らよりも数多くなると
主は言われる。
- 2 あなたの天幕に場所を広く取り
あなたの住まいの幕を広げ
惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て。
- 3 あなたは右に左に増え広がり
あなたの子孫は諸国の民の土地を継ぎ
荒れ果てた町々には再び人が住む。
- 4 恐れるな、もはや恥を受けることはないから。
うろたえるな、もはや辱められることはないから。
若いときの恥を忘れよ。
やもめのときの屈辱を再び思い出すな。
- 5 あなたの造り主があなたの夫となられる。
その御名は万軍の主。
あなたを贖う方、イスラエルの聖なる神
全地の神と呼ばれる方。
- 6 捨てられて、苦悩する妻を呼ぶように
主はあなたを呼ばれる。
若いときの妻を見放せようかと
あなたの神は言われる。
- 7 わずかの間、わたしはあなたを捨てたが
深い憐れみをもってわたしはあなたを引き寄せろ。
- 8 ひととき、激しく怒って顔をあなたから隠したが
どこしえの慈しみをもってあなたを憐れむと
あなたを贖う主は言われる。

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 5章21節～6章4節

5 ²¹キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。²²妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。²³キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。²⁴また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。²⁵夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。²⁶キリストがそうなさったのは、言葉を伴う水の洗いによって、教会を清めて聖なるものとし、²⁷しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。²⁸そ

のように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。²⁹わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キリストが教会になされたように、わが身を養い、いたわるものです。³⁰わたしたちは、キリストの体の一部なのです。³¹「それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。」³²この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。³³いずれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい。**6** ¹子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。²「父と母を敬いなさい。」これは約束を伴う最初の掟です。³「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる」という約束です。⁴父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章13～16節

¹³イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。¹⁴しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。¹⁵はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」¹⁶そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

抱き上げられる【こども説教のために】

わたしたちは、教会へと呼び集められ、一つになって礼拝します。主イエス・キリストに導かれて「平和を実現する」(マタイ 5:9) 者となるためです。

「エフェソの信徒への手紙」を記した使徒パウロは、同じ手紙の中で、「実に、キリストはわたしたちの平和であります」(エフェ 2:14) と証ししています。なぜなら、「二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」(同) てくださったからです。「キリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し」(同 2:15) てくださったのです。だからこそ、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」と使徒パウロは勧めるのです。

二人の人がまるで一人であるように一つになるというのは、難しいことです。結婚する人は、「二人は一体となる」と教えられますが、夫婦でも一つになって「平和を実現」し続けるのは難しいことです。人は、お互いに近づくことを拒んだり、引き離そうとする思いが働いたりすることが、あるのです。

主イエスに触れていただくとして子どもたちを連れて来た人々を、弟子たちは叱って追い返そうとしました。けれども、主イエスは、その子どもたちをご自分のもとに来させて、抱き上げ、手を置いて祝福してくださいました。抱き上げられた子どもたちと主イエスの姿こそ、一つにされた者の姿、平和を実現した者の姿、「神の国」に生きる者の姿なのです。

キリストに触れていただき、抱き上げていただきましょう。わたしたちも、互いに近づき心で触れ合い仕え合うことで、平和を実現する者となるのです。

触れていただくために

長崎に原爆が投下されたことを憶える日を、日曜日に迎えました。81年前のこの日、午前11時2分のことだったと伝えられています。今日、同地の教会では、日曜日の礼拝・ミサと共に、特別な祈りがささげられていることでしょう。もちろん、教会だけでなく、多くの人がこのときを祈りのうちに過ごしていることと思います。わたしたちの教会にも、そのときに長崎の地にいて被ばくされた方が連なっています。たとえそのような方がいらっしやらないとしても、わたしたちも、「平和を実現する」ことを願う者たちとして、同じ思いの祈りに連なる者でありたいのです。

長崎の原爆は、一つの大きな教会の真上で爆発しました。カトリック教会の浦上天主堂です。浦上は、江戸時代を生き抜いた潜伏キリシタンにも連なる多くのカトリック信者のいらっしやる地です。原爆を投下した米国は、もちろんそのことを知っていましたが、「教会が弾薬庫になっている」として攻撃対象から外すことをしなかったと言います。結果、教会堂は完全に破壊され、原爆で亡くなった浦上教会の信者は三千人を超えることになりました。それでも、生き残った信者らは、その廃墟となった会堂で祈りを続け、翌年には仮の会堂を建てて教会の営みを再開されたのです。

こどもの教会（教会学校）の夏のプログラムとして、「ソロモン神殿」の模型を作るという活動を始めています。ソロモン王が、父王ダビデから受け継いだモーセ由来の「神の箱」を納めるために建てたという神殿です。もちろん、その神殿は、今は残っていません。ソロモンが建ててから数百年後、バビロニア王の軍隊によって破壊されたのです。バビロン捕囚の数世代を経験したユダヤ人は、破壊された神殿を再建する事業を行いました。その再建された「第二神殿」は、紆余曲折があつて、主イエスの時代、ヘロデ王によって壮麗な大神殿に増築されていましたが、この神殿も、主イエスの直弟子たちが生涯を終えた頃、ローマの軍隊によって破壊されてしまいました。それから二千年近く、神殿は再建されていません。かわりに、そこにはイスラムのモスクが建てられ、ムスリムたちの祈りがささげられています。

地上に建てられた神殿も教会堂も、いつか崩れ落ちるときを迎えるでしょう。それは、自然の摂理というよりも、平和を破壊し、互いに争い合う人間の本性から来る結末なのです。

それでも、わたしたちは「祈りの家」を必要とするのです。人は、独り立って祈ることができるほど強くはないからです。いいえ、人はだれでも、一人では祈れないことがあるからです。ただ、祈る者のいるところに近づき、祈る者の営みに触れ、祈る者の祈りに包み込まれることを通して、どうにか祈りから離れずにいる。そうするしかないときが、少なくないのです。

受け入れる

先週の主日礼拝の中で、一人の新生児の祝福をいたしました。教会で育った姉妹が結婚されて与えられた第一子です。誕生からちょうど一カ月となる日が日曜日で、初めての礼拝にお連れくださいました。まだ首も座らない赤子とご両親、またご家族のために祝福を祈りました。そして、牧師の特権で、皆さんの前で抱き上げさせていただきました。

ご両親にとって、我が子を人の手に託すというのは、勇気のいることだと思います。二十年以上前、前任地の教会に赴任したとき、わたしどもの子らは、上の子が三歳になったばかり、下の双子は生後八か月でした。大きな教会で、幼稚園もありましたから、幼児や赤ん坊の世話をしてくださる方がたくさんいらっしゃいました。皆さん善意で、手を差し伸べてくださるのです。ところが、こちらは、皆さんの名前も素性もまだよく分からない状態です。日曜日の朝、教会の役割がある親のもとから奪うように連れ去って行かれるのです。親として不安もありましたが、ただ祈って信じるしかありません。本人たちも、ただ黙って受け入れるしかなかったでしょう。そうだとすると、それでよかったのだと思います。教会というところは、そうして互いを信じて委ね合うことによって成り立つところだからです。委ねたからには、相手を尊重して、その手の働きを受け入れるのです。そのようにしてこそ、**互いに仕え合う**関係を作っていくところなのです。

人の手で造られた神殿が破壊され、教会堂が崩れ落ちるように、祈りの共同体である教会にも亀裂が生じ、壊れていくことがあります。完全にバラバラになってしまうこともあるかもしれません。

主イエスの弟子たちが子どもたちを連れて来た人々を阻もうとしたとき、彼らに悪意はなかったでしょう。主イエスのために思い、主イエスの教えを聞こうと熱心に集まって来ている人々のことを思って、善意でそうしようとしたのです。けれども、それは、大切な何かを犠牲にしてしまうことだと、弟子たちは思い至りませんでした。

主イエスは、自分では何も主張できない子どもたちを、ご自分のもとに連れて来させました。子どもたちを、その御手の内に受けとめてくださったのです。いいえ、その子どもたちを連れて行き、主イエスの御手に委ねようと勇氣をもって行動した人々を、受けとめてくださったのです。

「**子供のよう**に神の国を受け入れる人」になるようにと、主イエスは言われます。祈る者たちの営みを受け入れるのです。その祈りのうちに受け入れてくれる者のもとに、身を委ねるのです。その手が伸ばされ、もたらされる祝福を、祈りとして受けとめるのです。それは、小さなことから始まるのです。しかし、小さなことから、大きなことが始められるのです。